ジョージ・グラントにおけるリベラリズム批判

清滝仁志

はじめに
一　政治哲学者グラントとは
二　カナダ政治思想の概観
三　「普遍的同質的国家」アメリカの拡大
四　グラントの思想とカナダの知的世界

はじめに

英誌『エコノミスト』二〇一六年一〇月二十六日号は「自由は北へ（Liberty moves north）」とカナダを特集し、表紙には自由の女神に扮したジャスティン・トルドー首相の絵を載せている。そこでは、内向きになっている欧米

先進国の中で、自由貿易、難民受け入れを唯一、積極的に推進する模範として、カナダを採り上げている。

カナダにおける多文化主義、多様性、人権を支えるリベラリズムは、政治思想史研究において注目されてきた。チャールズ・テーラーやウィル・キムリッカといった政治哲学者の著作は日本でも紹介・翻訳されてきた。しかし、リベラリズム研究は、多文化主義、多様性、人権についての抽象的理論・概念に焦点が向けられてきた。カナダの学会においても、精緻な政治哲学的分析が大半である。抽象的・普遍的理念の重要性を否定するものでないが、『エコノミスト』誌に見られるようにカナダを理想郷のように論じるのは適当でない。政治思想は特定の社会に根差し、普遍的適用には困難がともなう。このリベラリズムがカナダ社会において、なぜ成立しているかという視点は必要である。

世界から模範ともされるカナダのリベラリズムは、そもそもリベラル・コンセンサスというべき政治枠組の中で存在してきた。世界で最も成功した政党といわれた自由党の長期政権の下で育まれてきた。リベラリズムには、遠心的要素があり、ナショナリズムと相反する部分がある。連邦政府による高福祉を媒介に国民統合と両立してきたことなど、特殊な政治的事情があったことは見逃せない。とくに二〇〇〇年以降、グローバル化・市場化の進展、移民増加により、リベラル・コンセンサスの政治枠組が動揺し、普遍主義的リベラリズムは国民統合の課題との対峙を余儀なくされてきた。この状況変化にかかわらず、普遍的・抽象的リベラリズムにこだわるならば、この理念は、グローバル化進展後の社会変化に対する批判原理として後ろ向きに用いられることになる。ナショナルな傾向をもつハーパー保守党政権（二〇〇六－二〇一五）をリベラリズムの伝統からの逸脱とし、二〇一五年のトルドー自由党政権の誕生を本道への回復とみるカナダ知識人は多い。『エコノミスト』誌のカナダ称賛もその流れにあろう。

筆者の問題関心は、現代カナダにおけるナショナル・リベラリズムの政治潮流を一九七〇年代以来のリベラル・コンセンサスの衰退とアメリカ起源のグローバリズムとの緊張関係に着目し、政治思想史的意義を明らかにすることである。そのためには、具体的な知的文脈の分析を通じ、この思想構造を解明する必要がある。抽象的理論を政治的文脈と切り離して解釈する従来の方法では、リベラリズムの変容を把握することが困難であり、この構造の解明こそが、原理としてのリベラリズムの実践的展開を可能にする。

筆者は、次の三点に着目して研究を展開している。第一に、カナダのリベラリズムは個人を単位とし、国民統合と微妙な緊張関係にあり、リベラル・コンセンサスの政治枠組と連関して存在してきたことである。とくに連邦政府による分配は統合の重要な手段であった。第二にグローバル化、市場化、移民の増加にあって、この政治枠組が動揺し、リベラリズムの普遍主義的理念と国民統合の対立が顕在化したことである。第三に、保守主義・社会主義をも包摂した新たなナショナル・リベラリズムの思想構造が形成されつつあることである。

本稿は、研究の最初の試みとして、リベラリズムと国民統合との矛盾をいち早く指摘した政治哲学者ジョージ・グラント（一九一八－一九八八）の議論を分析する。グラントは、個人を単位とする理念が国民意識と緊張関係にあり、後者がグローバルな普遍主義の前に失われ、国家解体に陥る危険を早い段階から警告してきた。この哲学的分析は後における保守主義および社会主義における国民統合についての議論の形成にも影響を与えていた。

グラントはカナダにおいて学術のみならず政治的実践においても影響を及ぼした人物であるが、日本で翻訳はなく研究も皆無である。それは彼の著作が時事評論中心であり、思想解釈がカナダの具体的思想状況と切り離せないためである。逆に言うならば、思想解明はカナダの知的潮流全体を把握する上での前提作業となる。

本稿では、グラントの思想において、リベラリズムと国民統合の衝突を説いた著作『国民への挽歌（*Lament for a Nation*）』の議論を中心に、アメリカの普遍的リベラリズムに対峙するカナダにおける国民統合との緊張関係を明らかにしていきたい。

一　政治哲学者グラントとは

ジョージ・グラント（George Grant）は一九一八年にウィリアム・グラントの息子として生まれた。父はアッパー・カナダ・コレッジ（イギリスのパブリック・スクール的なトロントの名門私立学校）の校長であった。ジョージの一族はカナダでは学者や外交官を輩出した名門である。祖父のジョージはクィーンズ大学（オンタリオ州キングストン）の学長であり、母方の祖父ジョージ・パーキンもまたアッパー・カナダ・コレッジの校長を務め、英語圏では名誉とされるローズ奨学生制度の設計をおこなった。[1] 叔父には著名な外交官で、カナダ人としては初めて総督となったヴィンセント・マッセイがいた。[2] さらに甥にはジャーナリストとして活躍した後、ハーバード大学教授、自由党党首を務めたマイケル・イグナティエフと、政治思想史専攻のトロント大学教授エドワード・アンドリューがいる。もっとも、グラントは、自由党エスタブリッシュメントと関係の深い一門の人々とはそれほど深い付き合いをしていたわけでなかった。政治思想を研究する二人の甥のうち、彼の思想の理解者はアンドリューであり、叔父についての論文もある。[3]

グラントはアッパー・カナダ・コレッジ、クィーンズ大学を卒業し、一九三九年にローズ奨学生に選ばれ、オッ

クスフォードのベリオル・コレッジに留学し、A・D・リンゼイの指導を受けた。リンゼイは日本でも『民主主義の本質』の著者で知られる急進的自由主義者であった。渡英のひと月前に第二次世界大戦が勃発した。平和主義者であったグラントは、祖国への奉仕を求める家門の人々からの圧力に苦しんだ。軍務に就かなかったが、後方支援の奉仕を躊躇しながらもおこなった。後に、カナダ外交に大いなる関心を寄せたのもこの時期の経験によるものと思われる。

戦後、カナダに戻り、哲学者として教職に就くが、必ずしも恵まれた地位にあったわけでなかった。北辺の小都市ハリファックスにあるダルフージ大学に一九四七年から一九六〇年まで勤め、ようやく念願がかなって、トロントに新設のヨーク大学の哲学教授に着任となるも、トロント大学の教授が授業内容や単位認定を管理することを嫌い、就任を辞退した。幸いにもトロント近郊の工業都市ハミルトンにあるマクマスター大学の宗教学部の創設に加わることができ、一九六一年から一九八〇年まで勤めた。

グラントは、カナダのアカデミックな哲学者としては異質であった。大陸、とくにニーチェやハイデガーなどドイツ哲学に関心をもち、レオ・シュトラウスに傾倒するような者は稀有であった。また、今でもそうであるが、例外的に保守政党を支持する学者であった。さらにラジオやTV、一般向けの講演に力を入れていた。没後編纂された著作集があるものの、体系的著作はなく、哲学評論が中心である。その思想を知るには、個別の叙述を丹念に読む必要がある。カナダにおいて有名な哲学者の割に全体像を論じた本格的研究はそれほど多くない[4]。日本でのカナダ研究においてもほとんど触れられることはなかった。

二　カナダ政治思想の概観

グラントの思想、とくに主著の『国民への哀歌』を論じるには、カナダ政治思想の状況を踏まえる必要がある。ルイス・ハーツが『アメリカ自由主義の伝統（*The Liberal Tradition in America*）』（一九五五年）で指摘したような「生まれながらのリベラリズム」はカナダになかった。米大陸で唯一革命がなかった国であり、ロック的リベラリズムはいくつかある思想の一つに過ぎなかった。アメリカではこのリベラリズムが建国当初から支配的思想であり、それを擁護することが保守主義とされるが、カナダにはヨーロッパ起源の保守主義が存在した。イギリスやフランス起源の保守主義（イギリス起源はレッド・トーリーと呼ばれ、フランス起源は革命前のフランスの伝統に立ち、カトリックの影響が強い）が存在した。それに対抗して社会主義が発展し、有力な社会主義政党である新民主党が存在する。カナダの社会主義の起源はイギリス労働運動であり、マルクス主義の影響が希薄である。

議会政治においては、最近まで二大政党によって展開され、とくに自由党の政権が長期間にわたっていた。「世界で最も成功した政党」とか、「もとからの与党」といわれ、カナダのリベラリズムを基礎づける国際協調主義、高福祉、多文化主義の政策は自由党時代に確立した。この政策を積極的に推進したピエール・トルドー首相（在任一九六八－一九七九、八〇－八四）は、国際的に知られた政治家である。その息子ジャスティンも二〇一五年に、約十年ぶりに自由党の復活を果たし、首相の座に就いた。国際的に著名なカナダの政治思想家に、チャールズ・テーラーやウィル・キムリッカがいるが、彼らは自由党を支持するかは別にして、リベラリズムにもとづく政策の理論的支柱となっている。それに対し、グラントは自由党政権とその政策に批判的であった。カナダのエスタブリッシュ

メントの一門でありながら、グラントはこの自由党の主流に違和感を抱き、距離を置いた。逆に一門も彼の言動に違和感をもっていた。[5]

三　「普遍的同質的国家」アメリカの拡大

グラントが世間で注目されたのは、『国民への哀歌』による。二〇〇五年にカナダ文芸評論（Literary Review of Canada）によるカナダの名著百選の中に本書が挙げられたように、哲学者としての彼の代表的な著作として今も扱われている。本書は時局を扱ったパンフレット的著作で百頁くらいしかないが、グローバル化、アメリカの強大化が問題となると必ず言及される。

執筆のきっかけは、一九六三年に進歩保守党の首相ディーフェンベーカーが対ソ連ミサイル配備をめぐってケネディ米政権と対立したことである。カナダをアメリカの軍事的従属に導くとして拒否する首相に対し、アメリカ政府、そしてカナダ自由党は首相を批判した。左派の新民主党も自由党を支持し、少数与党であった進歩保守党は、総選挙を余儀なくされた。その結果、ケネディと良好な関係をもったレスター・ピアソン自由党内閣（ピアソンはスエズ紛争の際に国連での活躍でノーベル平和賞を受賞していた）が成立した。グラントは、かねてより自由党の対米協調路線に批判的であった。

『国民への哀歌』は一九六五年に出版され、カナダという国家そのものの喪失の危機を訴えた。この「哀歌（Lament）」とは旧約聖書のエレミア書を意識したものである。エレミアは神の教えに背いた祖国の滅亡を警告し、

実際にバビロン捕囚が起こった。文明論的スタイルで論じたこの哲学者の議論は、旧宗主国のイギリスが第二次世界大戦後、衰退し、隣国アメリカが新興覇権国として発展する中での国民の不安に応える作品であった。逆に言うと、時局的な内容もあってカナダ人以外に理解しにくく、また政治状況の変化もあって、本書やグラントが国際的に知られていない原因でもある。しかし、グローバル化が進んだ現在、普遍的国家アメリカについて論じた著作の意義は再評価されてよい。

『国民への哀歌』は全七章であるが、四章までがカナダがアメリカに従属化していく、当時の政治・経済状況を語ったものである。議論が時局論から文明論的なものへと展開するのは、後の三章である。短いながら、哲学的知識を踏まえた強烈な表現は後世に残るものであった。「カナダが併呑されるのは避けがたい」、「カナダの消滅は必然的である」というセンセーショナルな言葉を繰り返した。

第二次大戦後、同じ君主を戴き、憲法上のつながりをもち続けたイギリスの影響力が落ちた中で、アメリカのめざましい伸長は、カナダ国民に感じられていた。グラントは、世界における覇権の交代と単に見なかった。イギリスと全く異なり、不可避の発展性をもつ「普遍的同質的国家（universal homogeneous state）」と位置づけた。

グラントによれば、「普遍的」とは、「世界的国家（world wide state）」のことであり、最終的には「諸国民間の戦争における災厄をなくす」ことに至る。「同質的」とは、「すべての者が平等であり」、その国家において「階級闘争が消滅する」のである。つまり、この国家は、世界全体にまたがる国境も階級も越えた存在である。

グラントによれば、当時、一般の人々も哲学者も、「普遍的で平等な社会」を「歴史においてたどり着く目標」と考えていた。そして、この「普遍的同質的国家」実現の手段は、自然（nature）の征服をめざす近代科学である。

人間以外の対象ばかりか、人間の本性（nature）をも支配する。とくにアメリカの場合、生物科学や心理学が発展し、政治家に同質化・普遍化を推進する力をも与えている。一九四五年以降、「世界的な統一社会」は遠い夢でなくなり、実現に近づいていると考えた[6]（67）。

このような現代の文明は、すべての特定文化（local culture）を時代遅れとしてしまう。カナダは地理的・言語的にアメリカに圧倒されるだけでなく、特定文化であることで進歩の時代において消滅する運命にあるとグラントは言明する。その消滅には、三つの段階を踏むと言っている。第一に、どの地域の人々も不可避的に「普遍的同質的国家」の一員になるという。第二にカナダは「近代化の中心である社会」であるアメリカに隣接している。第三にほとんどすべてのカナダ人が近代化を善とみなし、彼らとアメリカ人の区別を重要としていないとする（68）。

一九五〇年代から六〇年代初頭の世界状況をみると、グラントの危惧も非現実的でなかった。ソ連とアメリカという普遍的なイデオロギーをもつ二つの超大国が台頭し、支配を世界的に拡大していた。とくにアメリカの伸長はめざましく、その科学技術発展とともに、諸問題を科学的発想で解決できるという楽観的発想が強かった時期である。またカナダは、国際組織設立に積極的に貢献し、ミサイル配置ばかりか朝鮮戦争に派兵するなどアメリカ主導の西側陣営の一員であった。

この「同質的普遍的国家」を主導するイデオロギーとして、グラントは北米のリベラリズムに注目した。それは無限の進歩の信条であり、人間の本質が自由であるとする思想である。人々がその教義を信じれば信じるほど、世界を望むようにつくる自由を制限するものはないと考える。社会秩序は人間がつくった便益であるとし、その唯一

の目的は自由の拡大である。人間は自ら望むときに望むことをおこないうる存在となる(70)。

そして、このリベラリズムの論理では、事実の判断と価値の判断を分け、後者を従属的なものとする。戦後のアメリカの社会科学で盛んに提唱された価値中立論であり、科学的政治学の発展にもつながった立場でもある。価値の判断を避け、事実の判断を強調することは、グラントによれば、結局、自由な人間が価値あるものをつくりだすことを認めることになる。人間にとっての善とは自分たちの善であると選んだものにすぎない(70)。さらに同時代のアメリカでさかんに言われた「イデオロギーの終焉」という言葉を、既存の善の概念にとらわれず社会をつくりあげねばならない意味に解釈した。自らが求めることを追求する人間にとって、これは完璧なスローガンであるというのが、グラントの見立てである(71)。

グラントはこのリベラリズムの思想的系譜を説明するのに、シュトラウスの『自然権と歴史』を引き合いに出した。この哲学者によれば、近代思想の二つの潮流のうち、アメリカのリベラリズムは、ホッブズ、ロックの近代自然権の系譜に属する。ルソー、そしてカントに起源をもつ共産主義と対峙している。リベラリズムは英語圏に立憲主義的政治と自由にもとづく安定をもたらし、まがりなりにも自然権を認めることで、西欧的価値を全体主義から擁護してきたとする(73-74)。

グラントによれば、ロック的リベラリズムの優位を単純に考えることが、「英語圏の一体化(English-speaking unity)」の志向につながり、カナダの独立を危うくする。そして、シュトラウスのいうようなロック的リベラリズムがもはやアメリカ文明の中心にないことを指摘する。現在、この国は近代進歩主義のイデオロギーに支配されている。かつての小土地保有者でなく、巨大な企業の社会となっている。科学者は組織的に自然や人間を支配しよう

としている。アメリカ資本主義は世界において各国の特定社会を破壊してきた。現代のリベラリズムは、共和国のそれにとって代わっていた。アメリカにおける西欧的伝統を受け継ぐものの多くが博物館の遺物化しているという(75-76)。

自然権的伝統は、私有財産の擁護に限定され、市場や小さな政府を評価する保守主義となっていた。この思想はヨーロッパの保守のように、有機的社会の伝統を維持するものでなく、進歩主義を前提としている。アメリカでは右とか左といってもリベラリズムの一種である。そして、その保守主義も一九六四年の大統領選挙でのゴールドウォーター共和党候補の大敗にみられるように、現代のリベラリズムに圧倒されている。この選挙の結果は、アメリカがシュトラウスのいうような保守主義的社会でなく、進歩の時代を推進する動的な帝国であることを示している(76-78)。

アメリカでは、ハーツやシュトラウスのように、ロック的リベラリズムが所与の思想としてあり、それが保守主義化しているという通説がある。グラントは、この古典的リベラリズムでなく、進歩とテクノロジーの時代におけるリベラリズムが支配的なイデオロギーとなっていると解釈している。

アメリカのリベラリズムは、思想においてもカナダに浸透してきている。カナダには英仏を起源とする保守主義が存在していた。グラントによれば革命国家のアメリカと異なり、ヨーロッパ起源の既存秩序を擁護し、進歩には懐疑的である。この保守主義の教義の中心は公的秩序と伝統である。個人の私的自由に対し、公共の善のために政府が経済を運営することに肯定的であった。保守党政権のもとでカナダの電力公社、大陸横断鉄道、公共放送が設立された歴史があった。この保守主義は西欧との紐帯に拠っていた。とくにイギリスとは国王の下での立憲主

義政府をもつことで深いつながりがあった(81-83)。

しかし、カナダの保守主義も危機にある。イギリスの政治伝統は国力衰退とともに後退していった。そのことはカナダの別の選択肢を失わせた。両国ともに伝統を担うはずの若い世代が第一次世界大戦で多大な犠牲を出し、帝国の伝統が衰退していったことをグラントは嘆いた。それは帝国の紐帯を重視する家門出身者の個人的実感であった(84)。

さらにテクノロジーの時代にあって、人々は、制度や慣習のたえざる変革に着手していくことになる。そして技術発展を通じて、いかなる秩序をも変えていく自由が第一の原理となっていった。このような社会では、人間の活動を規定する永遠の秩序という概念を真剣に考えられなくなった。秩序概念の喪失によって、保守主義は、財産権の保護、排外主義、懐古趣味に過ぎなくなった。イギリス由来の保守主義は、十九世紀におけるカナダ国家の確立に貢献していたが、この希薄化は、リベラリズムの攻勢の前にカナダの独立をも危うくする(84-85)。仏語圏におけるフランス保守主義も同様の運命に見舞われた。進歩の時代において、保守主義を担っていたカトリック教会は自由化し、社会での影響力を失っていった(87-96)。

このようにリベラリズムの浸透によって、カナダが国家でなくなっていくと、グラントは警告する。経済・社会がアメリカ帝国に融合されていく中で、政治は当面、一緒にはならないであろうが、国際的危機や政治権力の大きな変化でその過程が早まるかもしれないと憂慮する(97)。

グラントは、リベラリズムの哲学的前提として、必然性(necessity)と善(goodness)を同一視することを問題にした。進歩主義において、将来が過去に比べて、「より高度」で「もっと発展し」、「さらによいもので」、「より自由である」

と考える。そこに神の摂理を見出したのがヘーゲルであり、「世界の歴史は神の裁きである」といった。リベラリズムは歴史的に発展し、それがよいことなのである。アメリカの発展はその具現化である(99-100)。

戦後カナダの政治を支配する自由党はカナダにおけるリベラリズムを確立したが、グラントは彼らの思想をアメリカの支配を受け入れる大陸主義(Continentalism)として批判した。進歩の過程にカナダの消滅があり、それが善であると考えている。消費生活に重きをおくようになると、米加の差が非現実的で進歩に反するとされ、国境の存在が時代錯誤と考えられる。また、多くのカナダ人にとって、伝統や特権による制限のある自国よりも、アメリカは自由で開かれた社会とみられている。普通の人々が築いた、世界で最良の社会に思われた。アメリカの自由・平等・機会はカナダ人の心を揺さぶり続けた。ローズベルトやケネディといった指導者への共感にもあらわれている(100-101)。

この大陸主義はリベラルな歴史観に立っており、起源は、一九世紀イギリス自由主義者であった。大陸主義の信奉者は、アメリカのジェファーソンやジャクソンでなく、イギリスのミルやマコーレーを引用している。その主張は、第一にカナダ人がアメリカ共和国のようなもっと進んだ民主主義を求めていることである。政治だけでなく、民主主義を社会的平等、契約的人間関係、そして人種、信条、階級にこだわりなくすべての者に開かれた社会と同一視している。第二にナショナリズムを克服すべきものとした。大きな統治単位に向かうことが世界秩序の構築に向かうと考えた。ナショナリズムによる戦争の惨劇の後、それに共感することを否定した(101-102)。

進歩史観をとることによって、アメリカのリベラリズムに共感する大陸主義の立場が真の国際主義や人類連帯につながってくる。アメリカ帝国の支配に懸念を抱くことが批判され、ミサイル配備への協力を理由づける。グラン

トによれば、リベラリズムは、旧来の既成秩序の批判という起源をもっていたが、今や、米加のエスタブリッシュメントの声となってしまっている(103)。

このように進歩を続ける人類にとっての善という観点から、カナダ消滅が必然であることが導き出される。大陸主義を判断するのは、進歩的な政治哲学と歴史観をどのように考えるかにかかっている。大陸主義を嫌うならば、ある意味、進歩史観を拒絶することになる。進歩の時代において病気や過重労働、飢え、貧困が劇的に減っており、現代を否定することは、その成果を否定することになる。それにもかかわらず、グランドは同時代に起こっている事態に目を向けるべきとする。そして、核による破滅と大量飢餓と並べて、人間の本性を人工的に操作することの恐怖を挙げている。それを可能とする権力こそが想像可能な最もひどい専制とする(104)。この部分は理解しにくいが、この哲学者は、限りない進歩が人間の存在のあり方をも操作可能とする事態を最も恐れていた。

進歩と善を結びつけてしまっている現在の前提をいかに克服するのか。グラントはシュトラウスの枠組を再びもち出している。特定の時代における前提は、特定の状況で特定の者によってつくられる。マキアヴェッリ、ホッブズ、スピノザ、ヴィーコ、ルソー、ヘーゲル、マルクス、ダーウィンは人間本性や運命の理論を自らつくりあげた。それらは古典古代のプラトンやアリストテレスの著作の批判から生み出された。近代思想家は古代の不都合な部分を乗り越えたと自負する。進歩の時代の思想家は、古代哲学者や古典を、現在の完全な思想を用意するためのものとみなしてきた(104-105)。

しかるに古代の哲学者は自己の教説がすべての者にあまねく完全に通用すると考えていた。卓説した人間性について真の教義に到達していた。彼らは現代人に人間本性や運命について、進歩の時代のそれとは別の答えを与えた。

そのことは、自分自身やその世界についての核心の問いに関係するのである。

グラントは、古典古代の思想家の「普遍的同質的国家は僭主政となる」という教えに注目した。これを語るにあたって人間存在の全体にわたる説明が加えられる。政治哲学を越えて、形而上的主張に及ぶ。世界の変化は、それ自体影響を受けない永遠の秩序の中で起こる。人間の自由についての定義は、自由が人間の本質であるという現代の見方と異なっている。その科学は自然の征服を目的とするそれと異なっている(105-106)。

リベラリズムに対峙するには、こうした古典古代の叡智に目を向けることが求められるとグラントは考えた。そしてカナダの国家喪失の問題について、次のような問いかけをおこなった。

「もし、最良の社会秩序が普遍的同質的国家ならば、カナダの消滅はこの秩序のための一歩として理解されよう」、「もし普遍的同質的国家が僭主政となるならば、この固有の文化の喪失は僭主政の道を防ぐ小さな障壁を取り除くものとして理解されよう」という(106)。カナダ国家を擁護したのは「普遍的同質的国家」を支持せず、それが「僭主政」をもたらすという危機感からの結論であった。

以上のような『国民への哀歌』の議論において、シュトラウスへの言及が重要となっている。グラントはシュトラウスを「北米で最も尊敬している哲学者」と公言し[7]、本人とも頻繁に文通していた。大学人事においてシカゴの門下の推薦依頼さえおこなっていた。シュトラウスの「哲学は精神の卓越性である」、「永遠で普遍の秩序がなければ哲学がありえない」という言葉に注目し[8]、哲学の方法論のみならず、独特の教育方法ともども影響を受けていた。今でこそ、このシカゴの政治哲学者は注目されているが、当時、門下以外で、しかもキリスト教徒で密接な関係にあった外国の学者は稀であった。

シュトラウスとの関係で注目したいのは、グラントの論文「僭主政と叡智（Tyranny and Wisdom）」（一九六四年）である。これはシュトラウスの『僭主政について』をめぐるアレクサンドル・コジェーヴ（一九〇二－一九六八）との論争を題材にしたものである。コジェーヴはロシア出身のフランスのヘーゲル研究者である。双方の主張としてグラントが注目した点は『国民への哀歌』で言及される。コジェーヴについて「普遍的同質的国家は最良の社会秩序であり、人類はこの秩序の確立に進んでいく」、「普遍的同質的国家の実現は哲学の終わりとなる」との言葉に注目した。グラントは、若い頃からヘーゲルの著作に触れていたが、この哲学者の歴史主義についての解釈はコジェーヴにかなり依拠していたとみられる。

ヘーゲル＝コジェーヴ解釈に依拠したので有名な著作として、シュトラウス学派の政治哲学者フランシス・フクヤマの『歴史の終わりと最後の人間（*The End of History and the Last Man*）』（一九九二年）が挙げられる。冷戦が終結し、リベラリズムの勝利で歴史発展が終わりを遂げた後の状況をニヒリスティックに語っている。リベラリズムの発展の究極にニヒリズムがあるというのはグラントもすでに指摘していた。同じシュトラウス学派で『アメリカンマインドの終焉（*Closing of the American Mind*）』（一九八七年）の著者アラン・ブルームもコジェーヴのヘーゲル解釈を最も権威あるものと評価していた。[9] ブルームはグラントの古くからの友人であり、著書では、大学における価値相対主義にもとづく多文化主義教育の拡大に抗し、西欧古典教育主義の重要性を説いた。大学教育にこだわりをもったグラントの主張とも重なっていた。

この論争におけるシュトラウスの主張で、グラントがとくに注目したのは「普遍的同質的国家は、人類の最良の秩序どころか、究極の僭主政であり、人間性を根本的に破壊するものである」、「現在の僭主政とは無限の進歩に基

礎をおいており、近代科学によってそれが可能となる」という点であった。「普遍的同質的国家」の脅威、人間性の破壊、進歩と科学の連関は、グラントの議論の基本となっている。進歩という時代前提を克服するための古典古代の叡智を活用する方法も共通する。

そして何よりもシュトラウスが彼に与えたのは同時代の思想に対する見方である。このシカゴの碩学によってヴェーバーにおける価値自由論のもつ問題を認識したのに加え、とくにヘーゲルのような近代の進歩主義における矛盾を理解させてくれた[10]。現代における進歩と反動、リベラリズムと保守主義、社会主義と資本主義といった思想は、同じ立場に立ったうえでの視点の違いに過ぎないということである。技術発展の中で人間はそのような秩序をも変革する完全な自由をもつとの想定である。永遠の秩序など存在しないという考えを改めない限り、カナダを含む西欧近代の体制は生き残れない[11]。グラントの説いたカナダの消滅は社会現象からというより、哲学的帰結であった。

両哲学者の違いを挙げるならば、第一にアメリカの位置づけである。グラントは「普遍的同質的国家」であるアメリカのリベラリズムにおける世界的拡大を懸念したのに対し、シュトラウスはこのリベラリズムを保守主義としてむしろ擁護した。ロック起源のリベラリズムは、不十分ながら自然権を認めており、西欧の価値観を維持し、共産主義に対抗する思想であるとした。もともとグラントによれば、先述のとおり、現在のアメリカのリベラリズムは進歩主義と近代科学の発展を受けて、ロック的リベラリズムから変質している。

もう一つは、人間の最高の目的と哲学の関係である。両者とも古典古代の叡智に回帰することを説いたが、グラントは信仰も哲学の重要な要素としていた。もともと彼は神学に関心をもっており、博士論文はイギリスの長老派進学者ジョン・オマン（一八六〇－一九三九）の研究であった。人間の完全性を基礎づけるのは神的起源であり、

神の前にすべての魂が平等であることが民主主義の道徳的基礎と考えた。[12] これはオックスフォードでの師であったリンゼイの民主主義論を彷彿させる議論である。また、フランスの女性哲学者シモーヌ・ヴェイユ（一九〇九－一九四三）に傾倒していた。二十世紀の著作家の中で、他に比べることのできない最高の教師であるとし、聖人にして哲学者とまで称賛していた。聖人というのは最高の恩寵のために一身をささげていたからであり、哲学者というのは、今までの哲学者が最も重要と考えた伝統の中で、恩寵について注意深く、明らかにしていたという意味であった。[13]

グラントは、神の恩寵が最高の目的を認識する上で重要な役割をもつと考えていた。哲学の研究とは「社会の伝統を解釈するとともに、それらにおいて神の完全性を認識することに反するものを判断すること」としていた。[14] 彼にはヨーク大学の赴任時、哲学の講義で使用を義務づけられた教科書が古代哲学に背を向けており、学生に懐疑主義を促すとして、結局、就職を辞退したというエピソードがあった。[15]

グラントは、アメリカのリベラリズムに宗教的背景をみていた。プロテスタンティズム、それもカルヴァン主義である。進歩の時代以前の歴史がない新大陸において、その神学の特徴が際立って表れた。ヨーロッパと精神的に異なるのは、ギリシア以来の知的伝統と断絶し、古典古代の瞑想(contemplation)を切り離してしまったことであった。これにはカルヴァン主義の聖書至上主義がかかわったとしている。新開地では、自然を通じ聖なる存在を認識するのでなく、自然の克服が目的となってしまい、自由が自己目的化し、テクノロジーが優位に立ったリベラリズムが生み出されてきた。[16]

グラント研究者のウィリアム・クリスチャンはキリスト教に対するグラントの見解を次のようにまとめている。

①キリスト教は西欧の知的遺産を形成するのに主な影響をもった、②プロテスタンティズムは、主観的良心が中心であり、人間の存在を第一の善と考えている、③北米でのキリスト教はカルヴァン主義の形態をとる、④この形態のキリスト教は自然を自らの意志に従属させることを促している、⑤科学万能化を制限する神への信仰が急速に衰退している、⑥近代技術文化はキリスト教的ヨーロッパの直接の後継であるという点である。[17]

グラントはプロテスタントだけでなく、西欧キリスト教における進歩主義にも批判的である。西欧キリスト教とキリスト教自体を区別し、アウグスティヌス以来の西欧キリスト教が極端な世俗的進歩主義をもたらしたとする。そして西欧文明の他文明に対する優越感につながった。現代の西欧は世俗したキリスト教とユダヤ教の世界とさえ言っている。[18]

こうした見方をとるグラントがニーチェに関心をもっていったのも不思議でない。ニーチェを評して、近代を完全に表現した最初の人物としている。理性の時代の終わりを喝破したとする。この哲学者は近代科学がその時代の墓掘り人になったことを指摘したという。[19] 科学は究極的な目的をもたずにすべてを説明可能とし、人間も究極的目的をもつことを信じなくなった。[20]「我々は皆、神の前に平等である。しかし今やこの神は死んだ」というニーチェの言葉に注目した。キリスト教は人間の平等を基礎づけるが、それを支える宗教を人々が信じなくなっている状況を表していると理解した。[21] リベラリズムは、価値判断を排除し、人間中心の技術の進歩発展の上に成り立っているが、その脆弱性をニーチェの言葉に見出した。この哲学者は、この世の主人たる者を問うたが、核兵器の時代の我々は、それを扱うにふさわしい者を求める状況に至っていると、グラントは述べた。[22] 人間のつくった核技術が人間の破滅を可能にするのは、人間中心の時代を象徴する現象であった。

四　グラントの思想とカナダの知的世界

グラントは保守政党を支持していたが、『国民への哀歌』は、既存体制に批判的な社会主義者や、ベトナム反戦運動の高まりとともに左翼の学生によって注目された。学生集会に招かれ、社会評論家として注目された。アメリカの世界支配に抵抗して、カナダのナショナリズムを評価する点では左翼と共通する。

逆にリベラル・コンセンサスの中心であった自由党のエスタブリッシュメントには、イギリス帝国への懐古主義として過小評価された。グラントがレッド・トーリーの哲学者とみなされたのもそのためである。グラントのリベラリズム批判は、カナダにおけるリベラル・コンセンサスを確立したピエール・トルドー首相の政策とは全く対照的である。グラントはトルドーを社会契約論者であり、近代主義に立ち、ナショナリズムを全く否定しているとした。[23] そしてトルドーと激しく対立したケベックのナショナリストを評価した。カナダ全体では、国民統合を危機に陥らせた分離主義者として批判されたが、グラントは特定の文化を擁護する存在として彼らに同情的であった。そして独立派の市民権を制限したトルドーのケベック制圧策に批判的であった。

リベラリズムの系譜に立つ甥のマイケル・イグナティエフは、叔父の著作について否定的であった。その批判をみると、リベラリズム側の立場がよくわかる。マイケルはグラントの保守主義はカナダ的保守の伝統でないという。グラントの祖父も曾祖父も保守主義者であったが、アメリカに否定的でなく、科学やテクノロジーに敵対心をもたず、進歩を受け入れていたという。その上で三つの点から批判した。第一点はカナダとアメリカの相違を叔父が過小評価したことである。カナダの歴史と政治的伝統を誤解したという。第二点はイギリスをよりどころにしすぎて、

カナダの多様な起源を軽視したことである。第三点は、同時代以降のカナダの繁栄を直視しなかったことである。それはグラントが嫌った自由党政権によって成し遂げられた。この書が出て五十年たってもカナダ意識が弱まっているという者はいないとイグナティエフは断言している[24]。

政治家になってからの書物であり、党派的記述もあろうが、マイケルは、叔父の抱いていたリベラリズムに対する問題関心を共有することはなかった。政治思想史研究者イグナティエフはシヴィック・ナショナリズムをエスニック・ナショナリズムから分け、リベラリズムと共存可能なナショナリズムを説くが（トランプ大統領誕生にともなう世界のナショナリズム高揚を憂慮した『エコノミスト』誌は、マイケル由来のこの言葉を使っている[25]）、叔父の説いた文明論的リベラリズム批判やニヒリズムの危険について問題意識すらなかったのではないか。英米に長く在住していたコスモポリタンであり、英語圏の国際的・普遍的リベラリズムは自明のものであった。父がピアソンの側近であり、自由党党首にもなった彼と叔父との学問的・個人的接点はあまりなかったようである[26]。

グラントはアカデミックな哲学者ではなかった。たえず同時代の問題に関心をもち、それを哲学的に解釈し、大学のみならず、社会活動の中で披露していた。その思想の全体像を把握するのは難事である。その哲学的関心は、ヘーゲル、ハイデガー、ニーチェ、シュトラウス、そしてシモーヌ・ヴェイユと多岐にわたる。研究の足掛かりは最も有名な著書の『国民への挽歌』となるが、時局論ということもあり、この思想家の知的世界の全体解明に至らない。『テクノロジーと帝国（Technology and Empire）』（一九六九年）という論文集があるように、今後、テクノロジーと帝国を軸にすることで、現在につながるグラントの意義を明らかにできるのではないか。テクノロジーへの関心は、ハイデガー、そしてジャック・エリュール研究によって深められ、グラントの思想において重要な要素となった。テ

クノロジーの自己発展が及ぼす人間性の破壊に対する懸念を絶えずもち続けた。この問題は後の機会に解明したい。

日本であまり知られていないが、グラントの後世代において、カナダ・リベラリズムへの批判的研究も進んでいる。イグナティエフの従兄弟のエドワード・アンドリューは叔父のシュトラウスびいきに賛同はしていなかったが、マキアヴェリ以降の西欧近代思想を帝国と共和国を比較する観点から分析している。[27] またマクマスター大学での門下生ジャネット・アジェンスタトは、カナダ政治思想におけるリベラリズムとロマン主義の二つの潮流を指摘した。[28] 青年時代、メディアでグラントと共に活動したガッド・ホロヴィッツ（Gad Horowitz）はカナダにおける社会主義の存在をヨーロッパ起源の保守主義との対峙から特徴づけた。[29] このようにグラントの指摘したさまざまな視点をもとにカナダ政治思想の研究が展開している。

注

（1）パーキンの事績については、次の文献を参照。英帝国の熱心な支持者であった。ローズ奨学金創設も帝国の紐帯を強化するためであった。イギリスの戦争に巻き込まれることに懐疑的なグラントとは対照的である。William Christian, *Parkin : Canada's Most Famous Forgotten Man* (Toronto, 2008)

（2）グラントの一族について、イグナティエフによる伝記参照。Michael Ignatieff, *True Patriot Love* (Toronto, 2009)

（3）E. Andrew, *George Grant on Technological Imperatives*, in R. Beiner, R. Day & J. Masciulli (Eds.), *Democratic Theory and Technological Society* (NY, 1988)

（4）次のフォーブスの著作は、グラントの思想を全般的に論じた代表的な研究文献である。しかし、項目別にグラントと関係のある思想家の説明があるが、グラントの思想の構造を解明していると言い難い。Hugh Donald Forbes,

George Grant: A Guide to His Thought (Toronto, 2007)

（5）甥のイグナティエフによれば『国民への哀歌』は一門の者にとっては想像もできず、現実とも思えない無茶な思い込みに思われたという。Ignatieff, p.143.

（6）George Grant, *Lament for Nation; The Defeat of Canadian Nationalisn* (Carlton University Press, 1994) 以降、本書からの引用は本文中にページ数だけ記入する。

（7）一九六〇年四月十四日マレー・ロス宛書簡より。ロスはヨーク大学の設立代表者であり、グラントはヨーク大学で使う教科書が自身の哲学に反することを述べていた。当時におけるシュトラウスの認知度を考えると思い切った発言である。William Christian ed., *George Grant : Selected Letters* (Toronto, 1996), p.202

（8）William Christian, *George Grant: A Biography* (Toronto, 1993), p.225.

（9）Christian, *Grant*, p.224.

（10）David Cayley, *George Grant in Conversation* (Ontario, 1995), p.72.

（11）Christian, *Grant*, p.240.

（12）Christian, *Grant*, p. 156.

（13）Christian, *Grant*, p.228.

（14）George Grant, *Philosophy in the Mass Age* (Toronto, 1959)

（15）Christian, *Grant*, p.202.

（16）George Grant, *Technology and Empire* (Toronto,1966)

（17）Christian, p.232.

（18）さらにグラントはキリスト教から西欧的要素を取り去るべきであるとする。この進歩主義ゆえに西欧文明は他の文明を下にみるとしている。Cayley, p.119.

（19）Cayley, p.111.

(20) Cayley, pp.111-112.
(21) Cayley, p.113.
(22) Cayley, p.116.
(23) Cayley, p.149.
(24) Ignatieff, pp.147-148.
(25) The New Nationalism in *The Economist*, Nov., 19-25, 2016, p.11.
(26) 逝去の数年前、ハリファックスの叔父の家を訪問した際、自分のルソーに関する著作について話をしたと回顧する。その際も自分のリベラル色が相手を刺激しないように気を遣っていた。とくに中絶反対についての話題は難しいとある。Ignatieff, p, 151. 筆者が二〇一二年に本人にインタヴューした時も、中絶についての叔父の主張に賛同しがたいと話していた。
(27) Edward Andrew, *Imperial Republics: Revolution, War and Territorial Expansion from the English Civil War to the French Revolution* (Toronto, 2011)
(28) Janet Ajzenstat, *The Once and Future Canadian Democracy* (Mcgill Univ, 2003)
(29) Gad Horowitz, Conservatism, Liberalism and Socialism in *Canadian Journal of Economics and Political Science*, vol.32, No.2, 1966.